



特集記事 | Feature Article

芸術を志す者は、美しい景観を守る一地上設置型
太陽光発電パネルに寄せて

To Nurture Oneself As an Artist, All Should Cherish Our Beautiful Nature: On the occasion of the PV facility-siting in Hokuto City

田中 正巳（画家／太陽光発電を考える市民ネットワーク・共同代表）

Masami TANAKA Artist Painter, Joint Representative, Citizen's Group for Nature-Friendly Solar Panel Settings (CGNFS)

著者紹介

著者の田中氏は、1947 年和歌山県に生まれ、金沢美術工芸大学を卒業後、行動美術協会会員、日本美術家連盟会員として、画壇で活躍してきた抽象画家である。1986 年に多摩総合美術展の大賞を受賞するなど、長く首都圏を拠点に活動後、北杜市へ転入された。北杜市は軽井沢などと並ぶ東京近郊の避暑地、別荘地としての側面をもち、人口の多くを移住者が占める土地柄である。この地域の特徴は太陽光発電をめぐる問題を考える上で見落としてはならない事項のひとつといえる。移住者のお一人である氏のご見解は、この問題を広い視野から捉え直す上で、極めて有益な示唆を含むものとなろう。以上の理由から、本特集の執筆者に必要不可欠と考え寄稿を打診したところご快諾を得た。ご寄稿に篤く御礼を申し上げます。（鈴木晃志郎）

私は、生活の「第一義的活動」として絵画制作を仕事としている者です。「仕事」と言うと、作品を売るために絵画制作をしているのかと言われそうですが、そうではありません。個展をすれば作品が売れば良いと思うし、購入希望者がいれば喜んで売却し、売れた枚数に一喜一憂したりもします。部屋に飾る「風景画」が欲しいと言われれば喜んで「風景画」も描きます。しかし、「第一義的活動」は作品を売るためのものではありません。

自分の、芸術的良心と言えるものと忠実に向かい、今私自身が、私以外の世界に何を発信すべきかを熟慮して「心の結晶」というべきものを表現することを、「第一義的活動」としています。その活動から生まれた作品を美術館や画廊で発表しています。わかりやすく言えば「売れない画家」なのです。

そんな私は東京都内の狭いアトリエで長く制作

していましたが、数年前、少し広いアトリエを求めて、山梨県北杜市に転居しました。その地と特別の関係があったわけではなく、都内より地代が安い、都心に出て日帰りできる、最寄り駅に特急電車が停まる、風景が美しいようだ…といったくらしいの単純な選択基準で決めた土地でした。

しかし、住んでみてしばらくすると、この土地がすばらしいところだということが徐々にわかり始めたのです。北に八ヶ岳、東に富士山、南に南アルプス連峰と、三方を美しい山並みに囲まれ、その山あいから流れ出す清らかな水、四季折々に色合いを変える樹木群、山里に広がる田や畑の営み、澄んだ空、浮かぶ雲…。どれをとっても見とれてしまう美しい風景が広がっているのです。都会生活が長かった私にとっては、今まで知らなかった自然の美しさが驚きでした。そして、あらためてこの地に転居してきてよかったと思いました。

私は、風景画を作品発表としてはいませんが、あまりの美しさに思いあまって風景スケッチをせざるをえない状況になる時もたびたびです。

地質学者によると、この地は地盤プレートがぶつかってできた世界的にも希有な地形だということです。美しい稜線の高い山が山里まで迫り、山々と山里が織りなす風景は世界に誇れる風景群であり、北杜市の一部も含む南アルプス連峰周辺は、2014年に「ユネスコ・エコパーク」に登録されました。

そんな美しい風景を満喫していた中、昨年4月、我が家のすぐ近くに太陽光発電パネルが設置されるという話が耳に入りました。その設置のために大規模に森林を伐採し始めているということです。私は即座には意味がよくわかりませんでした。太陽光発電と言えば屋根の上に設置するものだと思っていたからです。「地面にパネルを並べる・・・？」—思いもしていなかった現実が起こりつつあったのです。すぐその現場を見に行くと、すでに大型重機が入り、森林が伐採され始めていました。次々になぎ倒されて行く樹木・・・。赤く丸裸にされて行く大地・・・。それは目にも無惨な光景でした。「これはおかしい・・・。」直感でした。空気を汚さない安全なエネルギー源と言われている太陽光発電パネルを、森林を伐採して作るという本末転倒・・・。「これは絶対におかしい、許せない・・・。」3000本の樹木を伐採して、事業者は近接住民の要望にも耳を傾けず、そのメガソーラーは完成して発電を開始しました。

この本末転倒の現実疑問を持った住民有志はすぐに行動を起こしました。事業者に掛け合い、市役所、県庁に掛け合い、署名運動をして、なんとしてもこの自然破壊、環境破壊に規制と歯止めをかけたいと動き回る日々が始まったのです。それから約一年半、我々の運動を尻目に、太陽光発電パネルは北杜市のいたるところに、まるでパッチワークのように次々と設置されていきました。富士山の裾野を隠すように、八ヶ岳の稜線をかす

めるように、甲斐駒ヶ岳の眺望を邪魔するように、ペンションの観光客の散歩を興ざめさせるように、民家の窓下で、街道の道脇で、あの黒い怪奇な無機質なガラガラパネルが、増殖していったのです。電力買い取り制度の甘い利益に群がる大中小の事業者は、この北杜市の自然を食い荒らしていったのです。私は太陽光発電そのものを否定しているわけではありません。設置する場所や方法に深い熟慮と厳しい規制が必要だと強調したいのです。北杜市のような、美しい自然と景観が財産のような地域に設置するものでは決してないと思うのです。

我々の「自然環境を守れ」「景観をまもれ」「住民との合意を」の運動は良識ある住民には徐々に理解され、それなりの広がりを見せ、山梨県や北杜市の当局も何らかの対応をせざるを得ない状況にはなってきました。しかしまだ、北杜市において経済産業省が設置認定している太陽光発電施設は4,000件を超えている現状です。

私がこの運動に関わり始めたのは、自分が美術創作者だという意識とはまったく関係なく、一人の人間として「大切な地面に無秩序にベタベタとあのパネルが敷かれるのはおかしい・・・。」という単純な直感からでした。また「あの反射がまぶしいガラガラパネルは、北杜市のような風光明媚な地域には全く似つかわしくない・・・。」という素朴な疑問からでした。それが、現代社会におけるなりふりかまわずの利潤追求の結果だという事実がわかると、直感や疑問は、私の心の中で怒りとして大きく膨らんでいったのです。

しかし、この一年半の運動を経験することによって、一人の人間の素朴な疑問や怒りだけではなく、美術、芸術に携わり、そしてそれを人生の第一義的な仕事だと考えている者にとっては、非常に大切な問題だと意識するようになりました。

芸術が、自然・人間・社会をまるごと扱うものであり、それらを写す鏡であるならば、芸術家は社会と大きく関わらなければならないという信念は持ち続けてきたつもりですが、よく言われる「科

学と芸術は社会発展の両輪だ」については、いまだその言葉に真の意味で実感が持てずにいた感がありました。しかし、この一年半の間に私の身のまわりで起きた、太陽光発電施設設置による乱開発、自然破壊の現実、その言葉の意味を深く考えるよい機会となりました。科学の力で実現した太陽光発電パネルは新しいエネルギー源として脚光を浴びていますが、実際にそれが人間社会や地域社会で使用される時、人間にとって幸福をもたらすものなのかを深いところで、また長期的な視野で考察するのは、芸術分野の役割なのではないかと考えるようになりました。そして、現実から目をそらせることなく、芸術家の目で「おかしいことは、おかしい」と言い続けることが、最終的には、科学分野に影響を及ぼし、真の文化に繋がっていくのではないかと思います。

美の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチは、芸術家であり、画家であり、科学者であり、都市計画者でもあったといえます。本年度のノーベル医学生理学賞を受賞した大村智氏は細菌研究と共に、芸術作品に非常な関心を持たれてきたことを知りました。意識しない深いところで、科学発展、社会発展に貢献する芸術家の役割が横たわっているのだと思索するようになりました。

そう考えると、私の「あのパネル設置はおかしい…」の直感は、無意識ではあるが芸術活動と無縁ではなかったのかも知れない…とも思うようになりました。あの無機質なガラガラパネルが地面を覆い、その配線がうねうねと地を這う光景が、日本中無秩序に広がったら…。そしてその設置によって、永い年月をかけて人々が育んできた日本を代表する景観地が無惨に破壊されていった

ら…。一度破壊された自然を元にもどすには、気の遠くなるような時間と努力が必要になります。地球という奇跡的な星のもと、人間は自然から恵みを受け、自然と共存し、自然から学び、生きてきました。その自然を壊すのは、いとも簡単ですが、それを守り生かしていくのは、大きな哲学と思想と努力が必要だと思います。それぞれの時代の、時々、目先の利益や快楽に惑わされず、自然と人間のほどよい関係を、直感と感性で見抜いていくのが、芸術活動に取り組む者の役割かもしれないと思い始めています。

私は、私のすぐ身のまわりの美しい風景を描くことを、現在、当面の仕事とはしていませんから、風景写生をしようとしたら、太陽光発電パネルが視角に入って仕事ができないという直接的な被害は受けてはいません。しかし、知人の風景画家は描ける場所が少なくなっていることに、大きな危機感と怒りを持っています。

私は、上記のように制作上、直接的な被害は受けていませんが、もっと深いところで、利潤追求のためのあの無機質なガラガラパネルがわがものの顔にのさばっていることによる不快感によって、精神的な被害を受け続けているといわざるを得ません。

目先の利潤のために大局を見失い、悲しい行動に走る人間社会の愚かしさと、それに敏感に気づき、人間と自然の共存を真剣に模索する人々の献身は、今後の私の絵画制作に大きな影響を与えるものだと確信します。

(投稿：2015年10月24日)

(受理：2015年11月1日)